The Institute for World Literature 参加記

ボストン 2016
2016 年 6 月 20 日〜 7 月 14 日
於：ハーバード大学

豊田 宏（東京大学現代文芸論修士課程）

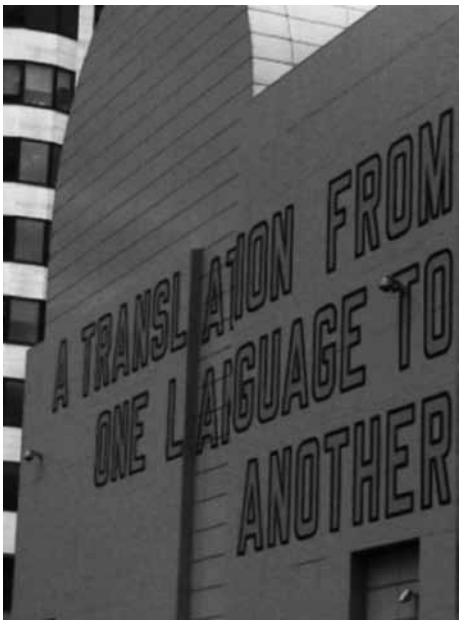
好きなことを好きなだけ。そんな雰囲気が IWL にはある。「世界文学の学校」という名のサマースクールも今年で 6 回目、今回の開催地はボストンだ。このプログラムの魅力は何と言っても「多様性」だ。世界各国からやってきた年齢も立場も国籍も言語も文化も様々な 150 人の参加者たちとともに過ごす 1 ヶ月。世界的に著名な教授陣の演習や講演、参加者同士で組織するゼミ（コロキア）、論文出版や就職に関するパネルディスカッション、他にも美術館やビーチでのレクリエーションといった様々な活動を通じて参加者たちとの交流を深めることができる。合言葉は他でもない「世界文学」だ。

成田から 13 時間のフライトを経て辿り着いたボストン。時差ぼけと興奮でいっぱいの中で IWL は幕を開けた。リスが駆け回る緑豊かなハーバード・ヤードを歩くキャンパスツアーの後、デイヴィッド・ダムロッシュ教授のウェルカム・レクチャー “What isn’t World Literature?” が行われた。これは言うまでもなく、著書である “What is World Literature?” をもじったものだが、題名の通りユーモアたっぷりの 60 分間だった。次の日にはレセプション・ディナーがあった。会場はハーバード大学比較動物学博物館。その昔ウラジーミル・ナボコフが働いていた場所だ。自分が研究している作家のかつての職場でパーティが行われるとは…とひとり悦に入ると同時に、博物館の中で立食パーティをするなんて日本では考えられないなと思った。実際、動物の剥製を前にして大勢の人が肉に食らいつく様子を見てベジタリアンは悲鳴をあげていた。

IWL では前期と後期の 2 週間ずつ 2 つの講座を受講することになっている。私が前期に受講したのは、マーガレット・コーエン教授（スタンフォード大学）の Imagining the Oceans だ。この講座では「群島」「羅針盤」「難破者」などをキーワードに世界中の海にまつわる小説や評論を読み、人間と海の関係や小説や映画における海の表象について考える。具体的には、ジョセフ・コンラッド、デレク・ウォルコット、ハーマン・メルヴィルからサーフィンやタコの生態を描いた映画まで多岐にわたる題材を扱った議論が行われた。エコクリティシズムに関心のある私にとって面白かったのは、エリザベス・ビショップの「魚」という詩についての発表だ。発表者によると「魚を釣るという行為は人間が魚の上位にあるということを前提としているが、人間が魚を釣ることは人間が魚に釣られることを同時に意味しており、魚＝自然と人間が一対一で対峙する特別な時間である」とのことだった。『老人と海』はその典型と言えるだろう。

もう一つ重要なのがコロキアである。これは週に一度、1 グループ 15 人程度の参加者が集まっ

て各人 20 分程度の報告とそれにまつわるディスカッションを行い、お互いの研究成果を共有するものだ。前回までは自由参加だったのだが、今年から参加が義務づけられた。私が振り分けられたのは「世界文学と翻訳」という班で、バイリンガル作家やアダプテーションに関心を持つ参加者と知り合うことができた。英語での発表が初めてだった私はかなり緊張していたが、コーディネーターやレスポンダントの方が上手くフォローしてくれたおかげで無事に終えることができた。

後期に受講したのは、ベルギーで教鞭をとるレイン・メイラーツ教授（ルーヴェン・カトリック大学）のセミナー Multilingualism, Translation, World Literature だ。その名の通り翻訳理論を読んで「自己翻訳」や「翻訳不可能性」といった概念について考える授業だ。そして受講者の多くが多言語環境で育ったバイリンガルだった。そのような多様なバックグラウンドを持つ参加者と、ベケットやナボコフ、コンラッド、ジョイスの翻訳について議論できたのは貴重な機会だった。特に印象的だったのは、ナイジェリアの作家ケン・サロ＝ウィワの “Sozaboy（少年兵）: A Novel in Rotten English” を扱った授業だ。ジュノ・ディアスをはじめとする母国語を大量に混ぜた英語で創作する作家、アメリカの「外」からやってきて第二言語としての英語で書く「ターミナル文学」の担い手たち、多和田葉子やジュンパ･ラヒリといった多言語作家に想いを馳せつつ、言語とアイデンティティについて考えながら、「英語はひとつの言語ではない」ということを実感した。

最終日。クルージング・ディナーのため、一行はボストン・ハーバーに向かっていた。その途中で見つけたのが右の壁画だ。「A TRANSLATION FROM ONE LANGUAGE TO ANOTHER」と書いてある。コンセプチュアル・アーティストのローレンス･ウェイナーによるものだ。僕にはなんだか、この壁画が翻訳について考え続けた IWL 参加者たちを祝福しているように思えた。ダムロッシュ教授は「世界文学とは、翻訳を通じて豊かになる文学だ」と言ったが、毎年世界中を旅している IWL も今後より一層発展していくことだろう。日々の予習や発表準備は確かに大変だったけれども、きっとそれは自分だけではなかった。夕食後のダンスパーティで盛大に踊る先生方と参加者たちを見ながら、そんなことを考えていた。